

『陰流書』の分析

加藤純一

（東京大学文学部）

昭和二十九年六月

（昭和二十九年六月）

昭和二十九年六月

昭和二十九年六月

昭和二十九年六月

昭和二十九年六月

昭和二十九年六月

昭和二十九年六月

昭和二十九年六月

昭和二十九年六月

昭和二十九年六月

加藤純一

昭和二十九年六月

昭和二十九年六月

昭和二十九年六月

昭和二十九年六月

An Analysis of the Book of
“KAGERYU-NO-SYO”

Jun-ichi KATO
(Saitama Institute of Technology)

CONTENTS

1. Introductory remarks.
2. Differences between “Shinkageryu-heihou-mokuroku”
and “Kageryu-no-syo”.
 - a) Difference of forms.
 - b) A matter of “Kageryu-no-syo”.
3. Toshiharu’s views of *Seihou*.
 - a) A general outline.
 - b) In regard to *Sangaku-enno-tachi*.
 - c) In regard to the terminology.
4. In regard to *Marobasi*.
 - a) An aspect of techniques.
 - b) In regard to *Aiuchi*.
5. Concluding remarks.

『陰流書』の分析

加藤純一

一 はじめに

武士史（特に剣術）の立場から近世中期という時代を見た場合、一般的には形骸化された「かた」稽古^①に対して、新たな「しない」稽古^②を導入し始めた時期として捉えられている。そして、一方ではそのしない稽古が発展し用具などが考案されていくが、他方ではそれらは本来の切り合いからほど遠いものであるとし、元来の保守的な立場を固持する者もいた。つまり、「かた」稽古と「しない」稽古の二局面を有していたのが近世中期といえる。しかし、これらのことはあくまでも一般論であり、地方によっては若干の相違が見られ、最近の地方史研究によって詳細な部分が徐々に明らかになれつつある。筆者自身も「尾張藩の剣術（特に新陰柳生流）」というテーマを持ち、尾張藩の剣術様相についてその全体像を明らかにすべく研究を進め

ているが、その全貌を掴むまでの資料はなく、ましてや近世中期というある意味では剣術界の転換期であるこの時期についても、未だ明確な事実を掴みきれてはいない。

そのようななか、ある特定の流派の変遷を追うことが、その全体像を明らかにする手段になるのではないかと考え、新陰柳生流という戦国時代に上泉秀綱によって開流された流派を取り挙げ、具体的にこの流儀（技法も含む）の考察を行ってきた。今回は、先に触れた剣術界の転換期にあたるこの時期に、新陰柳生流の道統を継承した柳生嚴春の勢法観が記されている『陰流書』を取り挙げ、その分析を試みた。この柳生嚴春とは、兵法補佐家の長岡房成と共に新陰柳生流の中興の祖と呼ばれ、それまで衰退していたこの流派を復興させた人物とされている。彼は第五世の柳生嚴包が著した開封嚴禁の『新陰流秘書』（以下「秘書」）を開示し、

流儀の立て直しを図ったのである。したがって、『陰流書』⁽³⁾と『秘書』⁽⁴⁾(そのなかの特に『新陰流兵法目録』⁽⁵⁾)とはその形態において非常に酷似してはいるが、そのなかにも嚴春の言が付加されており、そこに彼独自の勢法観を窺うことができるのではないかと考えた。

以上のことから、本稿では『陰流書』の詳細な分析を通して、新陰柳生流の当時の傾向を述べると共に、近世中期の剣術界の動向についても触れることにした。

二 『新陰流兵法目録』と『陰流書』との相違

先にも述べたように、嚴春はその道統を継承すると同時に、柳生嚴包が封印した『秘書』を開封し、衰退していた新陰柳生流を復興させたのである。したがっ

『新陰流秘書』(新陰流兵法目録)

○三学円太刀

・一刀兩段

・斬釘截鉄

・半開半向

○三学円太刀

・一刀兩段

・斬釘截鉄

・半開半向

て、嚴春の勢法の根底には嚴包の時代の勢法観が存在することは明らかであり、現に嚴春が著した『陰流書』と『秘書』にある嚴包著『新陰流兵法目録』とは、ほぼ同じ形式を踏んでいることから明白である。

そこで、ここでは『陰流書』に見られる個々の勢法に関する嚴春の若干の私見を基に、この時期の嚴春の勢法について見ていくことにする。

(一) 形態の相違

次の表は、『新陰流兵法目録』と『陰流書』に記載されている勢法の内容を示したものである。『陰流書』の項には、参考までに嚴春が補足した部分を抜き記しておいた。

『陰流書』

此構は下りて構る也。能々右の分別して待事を専らとつかう。すべて当流にては浅く勝事を用るなり。

身を一重にして一文字の太刀のごとくかまへてかゝるなり。敵その太刀を横になぐをうけ流して、敵の右へまはりて勝なり。遣手は中段ひきく左のひちをのぼして、太刀は相手の左の目へ

- ・大詰
- ・小詰
- ・睫徑
- ・和卜
- ・逆風
- ・必勝
- 九箇
- ・長短一味
- ・右旋左転

-
- ・大詰
 - ・小詰
 - ・睫徑
 - ・和卜
 - ・逆風
 - ・必勝
 - 九ヶ
 - ・長短一味
 - ・右旋左転

つきかけてかまゆる也。切にしたがひてもちりて勝なり。

是同事、切かけて見て、かまはぬものには長短の一味とさかりて勝也。太刀先引切を見、近きは取、うごきには心付事。

遣手は左太刀右の肩にかけて打あいて打にしたがひて勝也。必勝はとゞこをらぬやうに打太刀待心なり。とりくわてりと。必勝の気味打さげぬやうに、心ひろく。エびらつよく、心のこし先へかゝる事悪し。

遣手は右の肩荷にはらひのちのごとく。遣手序を切かけてひくときは身構は車の太刀勝。

遣手の心持、中段のせいがんえんびの初手を持かゝる。切かけて見てかつなり。やはらぎしむると云心をつかへとなり。三角なる身に切を不し持、行当切付る。跡に心のごつやうにえびら専一の事、付候事よこにつかぬやうに。

脇へもひらかれぬほそみちにての事也。なかとりをして身をひとへにしてうくるなり。うごきについていよく勝也。無刀の心にて直立、行つくは悪し。こむ吉、敵の足にのるほど行。さつと腰より行打出す。敵えかまはず遣ふ事。

遣手下段のせいがん、相手も下段、獅子の洞出ほら入などのやうにかまゆるなり。打にしたがひこむ也。打太刀見くらべぬやうに足にて詰るやうにえびら心。

遣手のかまへ上段のせいがん、我拳をかほのたてにしてしかく

・八重垣

・村雲

○天狗抄

・第一

・第二

・第三

・第四

・第五

・第六

○(奥義太刀)

・添截乱截

・無二劍

・八重垣

・村雲

○天狗抄

・第一

・第二

・第三

・第四

・第五

・第六

○(奥義太刀)

・添截乱截

・無二劍

るなり。何様のかまへにても、こして勝心持、専一也。かさより前にて取上勝。

相手は新當流まの太刀也。遣手は上段、かしらの上にかまへてかゝる。打にしたがひてもちりて勝也。

遣手は序切きりかけてみるに、それにものらず、一円定まらぬものは色をきりかけ、うつにしたがひて勝なり。

吾右にかまへ、左にかへても左足先也。二つ打合ぐわつして勝。中にて。

和卜に似、但二つ前にてとる。遠近に依て調子の数不定。からず早足打太刀より来る。

村雲に似、但替様に打、村雲は不_レ打

打太刀二刀、右に大、左に小を持、中段なり。味方も中段なり。右へしかけ左へひらく。

打太刀二刀、右に小、左に大持、小をしゆりけんにつ。味方は車なり。仕掛様右に同。

是は左太刀也。切相の内にかまへかけ、うら前調子にしたがひ勝也。中段のかまへ也。此一ヶ条、今の形とは違、追而可考_レ也。

打太刀二人、ぬかる方より勝。但し方には吾左より打。

添截は跡へかわる、乱截は前へ替る。又跡へかわる、打所は敵の両腕、はみね口伝。

打太刀添截にかまへたるを仕掛て勝。身位口伝。

- ・八箇必勝

- ・活人刀

- ・向上

- ・極意

- ・神妙劍

○二拾七箇条截相

- ・序 上段三 中段三 下段三
- ・破 折甲二 刀捧三 打相四
- ・急 上段三 中段三 下段三

*「奥義太刀」の勢法名は両書共記されていない

まず、『新陰流兵法目録』に見られ、『陰流書』に見られない勢法についてであるが、ここには「二十七箇条截相」並びに「奥義太刀」の「八箇必勝」（「奥義太刀」の勢法のなかの一太刀）が含まれる。これは『陰流書』に、

二十七箇条截相、八ヶ必勝は宗厳より不用^レ之^⑥。

とあることから、厳春が意識的に目録から削除したものとと思われる。

次に、『新陰流兵法目録』には見られず、『陰流書』に見られるものに、「転」がある。厳春はこの「転」

- ・活人刀

- ・向上

- ・極意

- ・神妙劍

○転

△二十七ヶ条截相、八ヶ必勝は宗厳より不用^レ之^⑥。

共に下段ぐわさず^⑦に打。

かけを外にしてぐわす、惣而ぐわし身口伝。昔はづし在に依て遠くぐわす。

敵仕掛来て、打所を其儘にて後へ引ぐわす。

出合て共にぐわす。吾は左、敵は右をうつ。まねく^⑧をする打太刀也。

に関して、

大転・小転二品あり。先大転より教、後に小転を可^⑦教也。

と記している。この「大転」「小転」に関しては、拙稿『素肌剣術期における新陰柳生流の勢法に関する研究』^⑧で既に指摘した通りであり、厳春は自ら書伝こそしなかったが、口伝によって厳春の時期まで受け継がれていったことが窺える。

『新陰流兵法目録』並びに『陰流書』双方に見られない勢法としては、「燕飛」「奪刀法」がある。「燕飛」

に關しては代々の継承者はその勢法名を書伝しない傾向が窺え、また「奪刀法」は極意の勢法であるため、これも書伝されていない。したがって、敵春もその傾向に準じたものと推測できる。なお、後の長岡房成が著した『刀全録・勢法篇』を見ると、両勢法ともそこに記載されていることから、口伝によって継承はされていたことが窺える。

(二) 『陰流書』の内容

さて、ここで具体的に『陰流書』に記されている勢法の内容について検討してみたい。たとえば、「三学円太刀」の最初の太刀である「一刀兩段」の太刀の説明箇所を見てみると、『新陰流兵法目録』には次のように記されている。

本云、車の構也。敵懸にして身にあらそふ時は其ま一調子に勝。又敵待て有之時は、太刀さきに付、敵の働に随て可勝也。「敵曰、他流には車はくるままはると云心にまわつて勝。当流にはそのまゝ勝也。」⁽¹⁰⁾

一方、『陰流書』には、

本日、車の構なり。敵懸にして身に争ふときは、其まゝ一調子に勝。また敵待て有之時は、太刀先に

付け敵の働きに随て可勝也。敵曰、車は車のまはると云心、他流にては廻て勝、当流にては其儘勝也。又曰、此構は下りて構る也。能々右の分別して待事専らとつかう。すべて当流にては浅く勝つ事を用るなり。⁽¹¹⁾

と記されている。『新陰流兵法目録』における「本日」並びに「敵曰」とは、それぞれ祖父の宗敵と父の利敵を指すが、『陰流書』においてもそれらは記されており、内容もほぼ同一のことが記されていることがわかる。問題は「又曰」の部分である。(前表の『陰流書』の項参照)この『新陰流兵法目録』に見られず、『陰流書』のみに見られる勢法の解説こそ敵春の加筆部分であり、彼の勢法論が表れているオリジナリティとして捉えることができよう。先の「一刀兩段」の場合を見てみると、加筆された部分の内容は『新陰流兵法目録』を補うものであり、否定的な事実を付加したり訂正しようとしたりするものではないことがわかる。また、他の勢法の解説の箇所を見ても同様のことが言えることから、この加筆分は補足的な説明であり、新たな変更事実を述べようとするものではないことがわかる。したがって、あくまでも敵包の主旨に沿う形で

それを発展的に捉えようとしたものと言えよう。

ただし、「天狗抄」の第七番目の太刀の説明の後は若干気になる文章が記載されている。それは太刀の説明と共に、次のように記されている。

本曰、是は中段のかまへ也。敵ごぶしを打所を、其調子をぬき、上よりかた手はなしてかづ。敵太刀を引上る。味方太刀の中とりをしてうける。又敵腰のあたりを横になぐる所を上より勝。又曰、是は左太刀也。切相の内にかまへかけ、うら調子にしたがひ勝也。中段のかまへ也。

此一ヶ条、今の形とは違、追而可考⁽¹²⁾之。(表中ラ

イン参照)

この一文からすると、当時使われていた「かた」(厳春が体系化する以前のもの)は厳包の時代の「かた」と異なっていたことが窺える。厳春はそのことを指摘し、再考するよう説いているのである。このような一文が書き記されているということは、やはり厳春自身、厳包の時期の勢法を手本としていたことがわかり、当時の「かた」に戻そうとしていた厳春の意思をそこに感じることができる。そして、その意思こそ新陰柳生流の再構築に注がれたものと言えよう。

三 厳春の勢法の捉え方

厳春は、中興事業の総集として新陰柳生流の勢法をまとめ、それが『陰流書』に著された。つまり、この書には厳春の勢法観が凝縮しているといっても過言ではない。そこで、ここではこの『陰流書』を三つの観点から分析することで、厳春の勢法観を明らかにしようとした。

(一) 勢法全般に関して

厳春は、『陰流書』のなかで次のような八項目を立て、「かた」を打つ時の心積もりを述べている。

惣躰表遣様、常々無刀の氣不忘可遣事

同 縁とる事悪し。別々になる様に可遣。

同 打太刀に勝つ心悪し。おそき様に可遣。

同 打太刀の色をかまはず、付心なく、立ちあ

がりのばす事専らに打太刀の程みる事悪し。

同 下段より遣とても打太刀より跡にくくと

可遣事。

同 遣様、勝心わすれ稽古第一也。

同 常々色々にはねなしくと可遣。手足を

不遣、心を可遣事。

同 仕舞を仕ふ様に心持、ゆたかに可遣。つよく遣ふときは、かたくなる。よわきときはしるくなる。乍去、つよき内にもむつくとする心を持。よわきときはたるむ心なき様に心がけ可遣。切を急間敷也。⁽¹³⁾

これを見ると、嚴春は内面的な問題（精神的側面）を非常に重視していることがわかる。たとえばその最初に書かれている「無刀の氣」を忘れてはならぬとか、あるいは「手足を遣わず心を遣うべき事」などの文章に表されているように、「かた」稽古で陥りやすい表面的な勝負を戒め、稽古者の内面に潜む心の問題を重視し、心で勝たねば本来の勝ちを得られないとする態度がそこに窺える。そして、「勝心わずれ稽古第一也」と、日々の稽古で上辺の稽古をせず、単なる勝敗に捕らわれず、常に己の心の在かを考え、心で稽古することが肝要であることを説いていることがわかる。

また、「打太刀に勝つ心悪し、おそき様に遣うべし」とか、「下段より遣うとても打太刀より跡に／＼と遣うべき事」など、「かた」稽古における具体的な勝ち方を示している箇所も見受けられるが、ここに示されている内容、すなわち相手を見切つて後、勝ちを得る

という「後の先」こそ、稽古者の内面的な葛藤を生じさせるには十分なものであり、心の諸問題を容易に表面化させることができるものと考えられる。つまり、普段から相手を見切る稽古を行えば必然的に心の鍛練に通じ、逆に心が迷うことなく一定していれば、十分に相手を見切る勝ち方ができるようになると言えよう。したがって、嚴春はこのような表現を用いながらも、実は稽古者である打太刀と仕太刀の間に、単なる技術的な勝ち方や、型にながされがちな勝負を超えるものを希求したかったものと考ええる。

(二) 三学円太刀について

新陰柳生流の「顔」でもある最初の勢法「三学円太刀」に関して、嚴春はどのような捉え方をしていたのであろうか。この勢法について、彼は次のようなことを述べている。⁽¹⁴⁾

三学は至て大切なる太刀にて此上なし。大切成とて常に遣はずんば益なし。よつて初学より是をおしへて日夜遣⁽¹⁴⁾之。

この文からすると、新陰柳生流における「三学円太刀」の重要性がよく窺える。この勢法には「高揚勢（勝包考案）」⁽¹⁵⁾と云って、初学者の為の導入的なものも

存在する、その内容は「合撃打ち」⁽¹⁶⁾といった高度な技が含まれているものである。その「合撃打ち」の意義については拙稿⁽¹⁷⁾で私見を述べたが、厳春も勝包同様この勢法の重要性を認識し、その主旨を継承していたことがここから窺える。

また厳春は、

只三学さへよくつかへば、其他はつれて昇達すべし。近よりつゝまやかに稽古するぞよからん。⁽¹⁸⁾

と、単に奥の勢法へ進むことばかりがよしとする風潮を戒め、一つずつ完璧にこなしていく堅実な稽古態度を奨励していることが窺える。

(三) 名称について

次に、太刀名について見てみよう。厳春は、「九箇」の勢法の解説の後で、以下のようなことを述べている。

表太刀の名の事、何れもいはれなき事也。いかにと云に、天狗抄に名なし、只一二三とまで也。天狗抄は至て大切にする太刀にさへ名なし。何本めと云をもまはり遠き故に名付之事とみへたり。吟味して益なき事歟。⁽¹⁹⁾

ここで言う「表太刀」とは「三学円太刀」と「九箇」

の勢法を指すが、それらの勢法にある個々の太刀名、「一刀兩段」や「必勝」などの名称には、これと違って取り挙げる程の意味がないというのである。その理由として、奥の勢法の一つである「天狗抄」の個々の太刀にも名称がなく、ただ一二三という呼称しかないということも挙げている。柳生厳長『正伝新陰流』によれば、代々継承者はその太刀名を極秘にしそれを記さなかつたとしている。⁽²⁰⁾現に、この勢法の個々の太刀名が書伝されるようになるのは、この厳春よりほんの僅か後の長岡房成『刀金録・勢法篇』からである。⁽²¹⁾厳包が著した『秘書』にも、同様に番号による呼称が記されていることから、書面上の太刀名とその個々の太刀の内容とは、あるいは厳春が指摘するように因果関係はないのかもしれない。この章の最後は、厳春の次のような言葉で締めくくられている。

今わづかの事を躰として、名の訳はかやうかやうといへども、つまるところ益なし。只芸のみ深切に心がけ、かやうの枝葉の小事に心を不用とも可ならん。⁽²²⁾

先の「天狗抄」には確かに太刀名は記されていないが、この「天狗抄」より奥の勢法である「奥義太刀」

の太刀名は記されている。したがって、ここで「天狗抄」の例を示したのはあくまでも方便であり、その裏では、不言実行、日夜稽古に鍛練すべしと説きたかったものと思われる。つまり、枝葉末節に捕らわれず、稽古の本道、すなわち真の切り合いを求めて修養することが、「かた」稽古をする者に与えられた使命なのであろう。

四 「転」論について

厳春はこの『陰流書』のなかで、「転」についてかなり詳細に述べている。「転」には「小転」と「大転」の二法があるが、そのうち「大転」は「小転」の導入として素肌剣術期に厳包によって新たに考案されたものである。ここでは厳春の勢法観をより明白にするために、特にこの「転」の勢法に関して別項を設け、厳春の「転」論について具体的に見ていくことにする。

(一) 「転」勢の勢法上の留意点

まず技術的な問題であるが、厳春は次のような部分を「物打ち」として捉えていたようである。

大転は切先より四寸二分下、鰐元より八寸上間八寸の内——中略——小転は切先より二寸下、鰐元より

六寸上、間六寸の内——後略——⁽²³⁾

このことからわかるように、当時は切先をも含む部分を物打ちとせず、十数センチ下からが物打ちとされていたことがわかる。さらに厳春は、⁽²⁴⁾

遣ひ品柄も右に准じ可_レ考知_レす。

と記しており、「転」以外で使う竹刀においても、これを基準に自ら判断せよとしている。(この「遣ひ品柄」とは具体的にどのような竹刀を指すのか今のところ判明していない)なお、この物打ちの基準から察すると、当時は鰐元二尺二分の太刀と鰐元一尺四寸の小太刀を稽古に用いていたことが分かる。

次に「転」の稽古方法であるが、厳春は次のような事を書いている。

今転の非切をするに至て難₍₂₅₎勝。

この「非切」とは本来「間截(ひきり)」と書くが、この「間截」とは一種の試合稽古であり、相手が無作為に出す太刀にに応じてこちら側も技を出すという稽古である。したがって、厳春の時期にも単なる「かた」稽古に留まることなく、この「間截稽古」のような実戦性を伴った稽古方法も取り入れられていたことがわかる。

なお、この「間截稽古」が「転」以外の勢法にも及んでいたのか否かは今のところ定かではないが、あるいは他の勢法にも波及していたのではないかと思われる。

(二) 「相打ち」について

さて、次に嚴春の内的な部分に目を向けてみよう。

嚴春は、

数十年已前も今も少しも昇達する事なく、いつまでかくてはてなんと、つらく／＼転の道を考るに、⁽²⁶⁾と述べ、

仕太刀は一尺余の小太刀を以て向ふ。打太刀二尺余の大太刀にて片手払に打、その拳をかたん事申々難_レ及事也。⁽²⁷⁾

と、小太刀で大太刀に勝ちを得ようとする「転」の勢法の難しさを記している。

ここで嚴春は、自らの経験から「転」の勢法を行うに当たつての心積もりを次のように述べている。

打太刀は大太刀を持って居れば、無底に勝たんと思ふ欲あり。仕太刀は小太刀にて勝がたき所をよく知る。故に、勝は捨置て相打にせんと心掛る所、自然と欲をはなる／＼所なるべし。其心にて相寸ならばい

かゞあらんや。乍_レ去相寸なれば心安く無難にかたんとをもふ心出来る也。⁽²⁸⁾

つまり、大太刀を使う打太刀は、その太刀の利を生かし勝ちを意識して掛かってくる。それに対して小太刀を使う仕太刀は、勝ちを意識せず「相打ち」を心がけて勝負すれば、そこに勝ちに対する欲が自然と薄れ、勝たずとも負けはしないようになるというのである。

単に勝負への欲を捨てて稽古せよという漠然とした教えは他の流派においてもまま見られることであるが、この「相打ち」を心掛けて稽古するという考えは一歩進んだ、具体的な稽古方法として捉えることができる。

さらに嚴春は、この「相打ち」の効果として相寸（同尺の場合）なば、相手よりもゆとりを持って勝負ができるとも指摘している。そして、この「相打ち」の効果を発展的に捉えて、次のようなことも述べている。

いつも転の心にて相討ヲノミ心掛ケレバ、昇達するの近道ならん。殊に相討を心掛て自然と欲すくなくなるは、何によつて稽古せしぞと源を尋ぬれば、転の徳なり。——中略——欲少なく相寸にても、相討

をのみ心懸れば、大きに遣ひ安からん。⁽²⁹⁾

ここに「転の徳」という言葉がでてくるが、日頃の稽古においても「相打ち」の心を忘れずに、それだけ心をかけて稽古をすれば、「転の徳」によって必ずや上達するというのである。

また、厳春は迷いを嫌い、善にも悪にも早く心を決め動かぬようにすることも説いている。そして、

たとへ常々品柄にての打ち合いかほどよくみへても実心にすわりなく、心うごひては実の用に立事なく負——中略——一心を大丈夫にする様に、日夜心

かけて稽古あらば、転の勝がたきは苦になるまじ。⁽³⁰⁾

と記し、「しない」稽古で上手に相手を打てたとしても、心に迷いが生じていては実戦の役に立たぬとし、日々「転」の稽古で「相打ち」を心掛けておれば勝とうという欲も去り、それに付随して心が座り迷いも去り、そこに実戦性が自然と生じるとしている。

五 おわりに

「はじめに」でも触れたように、厳春が家督を相続した江戸中期は、世の風潮から「かた」稽古が華法化され、かわって「しない」稽古が台頭してきた、謂所変容期にあたる。そのようななか、新陰柳生流のように「かた」稽古を固持していた流派は、当時の社会状況に応じた「かた」の改変に迫られていったものと思われる。ある流派は「かた」そのものを改変させる外的変革の立場を取り、また他の流派は「かた」の意義の再認識を促そうとする内的変革の立場を取った。そして、外的変革すなわち「しない」稽古が実際に打突することに実戦性を希求したのに対して、内的変革を遂げようとする「かた」稽古においては、「かた」の形骸化を克服し実戦性を付帯させることが要求されたものと思われる。

厳春はそのような状況下、後者の立場から稽古者の内面に存在する勝負時の心の葛藤に眼を向け、活性化を図ろうとしたものと思われる。それは「心」の問題とも言えるが、表面的な勝負観を否定し、対峙時に生ずる自己の「心」の在り方が本来の勝負を決めるもの

とし、「心」を鍛練することを説いていたのである。つまり、「かた」稽古の本来の意義を模索するなか、形骸化された「かた」には自己内面的にも相互的にも「心」の問題が欠如していることに気付き、この問題を解決することが即ち形骸化されている「かた」稽古を甦らせる術と考えたのであろう。そして、それを単に理念的段階に留めず、「相打ち」という実践段階にまで昇華させ、教授法の一つに取り入れたことが巖春の独自性として捉えることができるのである。

また、『陰流書』から察する限りでは、巖春は「しない」稽古を否定的には捉えていないことがわかる。これは、本稿で取り挙げた例からも明らかなどころで、「心」のない打ち合いに対しては否定的な立場を取りつつも、裏を返せば「心」のある打ち合いをせよということにならう。そしてこのことは、先の「かた」稽古における「心」の問題と合わせて、当時の剣術界への警告としても捉えられる。すなわち、「心」の問題を抜きにした「かた」稽古あるいは「しない」稽古は、やはり形骸化された「剣術」であり、形だけ追求しているものに過ぎないからなのである。

当時の尾張藩の剣術の様相を考えたとき、個々の流

派に関してはそれぞれの研究を待たねばならないが、今回の『陰流書』の分析を通して言えることは、近世中期というターニングポイントにおいて、各流派はその後の存続を考えた上で何らかの模索を行い、形骸化に対する歯止めを行っていたのではないかということである。それは、新陰柳生流が尾張藩のプロトタイプ存在³¹にあたり、その周辺域にある各流派においても「心」の問題を何らかの形で思惟し、実践していたものと考えられるからである。

—— 注釈並びに引用文献 ——

- (1) 互いに約束しあった形を、打太刀と仕太刀とに分かれて使う剣術稽古の一形態。
- (2) 約束された形に捕らわれることなく、相手の空き所を打ち合う剣術稽古の一形態。
- (3) 『新陰流関係史料』上巻 筑波大学武道論研究室 一五九～一七四頁 一九九〇年
- (4) 『同 右』 一七五～二二三頁
- (5) 『同 右』 一七五～一八〇頁
- (6) 『同 右』 一七二頁
- (7) 『同 右』
- (8) 『武道学研究』第二三巻第三号 日本武道学会二八

頁参照 一九九〇年

- (9) 柳生延春氏所藏
- (10) 『前掲書』(3) 一七五頁
- (11) 『同 右』 一五九頁
- (12) 『同 右』 一六八頁
- (13) 『同 右』 一七〇～一七二頁
- (14) 『同 右』 一六一頁
- (15) 古来の「三学円太刀」は一調子に使う為、その間の取り方は非常に難しい。そこで厳春は、初学者の為にそれを分解動作で使う勢法を考案した。それが「高揚勢」と呼ばれる勢法である。
- (16) 相手が真直に打ち下ろしてくる太刀に対して、こちらも真直な太刀で打ち下ろして勝つ技を指して言う。
- (17) 『前掲書』(8)
- (18) 『前掲書』(3) 一六一頁
- (19) 『同 右』 一六一頁
- (20) 柳生厳長 『正伝新陰流』 大日本雄弁会講談社 二八三頁 一九六一年
- (21) 「天狗抄」の太刀名には花車、明身、善待、手引、二刀、二刀打物、乱剣、二人懸の八つがある。
- (22) 『前掲書』(3) 一六六頁
- (23) 『同 右』 一七一頁
- (24) 『同 右』

- (25) 『同 右』
- (26) 『同 右』
- (27) 『同 右』 一七一～一七二頁
- (28) 『同 右』 一七二頁
- (29) 『同 右』
- (30) 『同 右』 一七二～一七三頁
- (31) 新陰柳生流は將軍家の御流儀にあたり、尾張藩も親藩という立場上、新陰柳生流を庇護していた感が窺える。事実、厳春の二代前は徳川吉通侯がその道統を継承しており、その他数名が道統の継承に関与している。以上のことから鑑みて、筆者は新陰柳生流を尾張藩の剣術を代表する流派の一つとして捉えている。